



file0

母性の目覚め

放課後、用務員室の前をたまたま通りかかったなななからは中からいびきが聞こえてきたので興味本位で足を踏み入れた。室内は薄暗く奥にはソファがあり、ソファで居眠りをする用務員のおじさん以外人が居る様子は無かった。なななは風邪をひかないようにと近くにあったタオルケットをかけようと手に取り広げたが、そのときおじさんが持っていた本を落としてしまう。本を拾い上げ何の本かと表紙を見ると『母乳育児のススメ』と書いてあった。

(なんでおじさんがこんな本読んでるの？子供が生まれたのかな？)

そう深く考えもせず本を開くと過激な赤ちゃんブレイを繰り広げる写真や文字で埋め尽くされていた。その本は育児本ではなくバブみ系エロ本だったのだ。

(ひっ!!なにこれ!?)

初めてエロ本を見たなななは衝撃をうけながらも見てはいけないものを手にした興奮からページをめくる手が止まらなかつた。

最初は目を逸らしたくなるような内容に恥ずかしさから挙動不審ではあったが、

ページを捲るに連れて自分の胸の奥の方からキュンキュンと淡い痛みが込みあげてきた。

(放課後だし、誰も来ないよね?)

なななはその痛みが分からないままドアを閉める。

周りを警戒しながら寝ているおじさんへと近づいていった。

キョロ

キョロ

「この気持ち……なんだろう……？
ななかもあの本のなかのお姉さん達みたいだ
男の人におっぱい吸わせてみたいで思っちゃった(´▽`)
初めての気持ちと緊張のせいで二人きりの空間がアツアツ
まだ周りを気にするななか。
ゆっくりとボタンを外していき胸を露出した。」



ドゴ

「ふふふ、このブラのおっぱいのと、外れるのが何でかや」とわかった……」
ななかは着用していたブラジャーは偶然にも授乳ブラジャーだった。
デザインが可愛い、カップの大きな下着は少ない。
可愛いデザインで、目ぼれて購入したの、たまたま授乳用だったのだ。

先ほどのバブみ系エロ本でブラジャーの機能の意味を知ったななは、この偶然を喜んだ。
起こさぬようにソツとおじさんの頭を抱えると、授乳ブラから出したおっぱいに近づける。
なかなか上手くしゃぶらせることが、できずやきもきしながら位置を調整をし、
ちよつと唇が乳首に触れた瞬間口のなかに乳首を押し込んだ。

「おし……」のブラって、ソツやって使ってたあ……あれ？う、うわあ……ななか授乳しちゃってる……
ママさんが赤ちゃんに「飯あげる」となのは、ミルクもまだ出ないなながおじさん相手に……」



ドゴ

ゴゴ

口の中に乳首が侵入して息苦しくなってきたことにより、鼻呼吸に切り替えながらもおじさんは口を動かして乳首に吸い付いてきた。無意識にも関わらず一生懸命自分のおっぱいを吸おうとする姿を見て何とも言えない幸福感をななかは感じていた。

「うううう……赤ちゃんみたいで可愛すぎるよお……」

「それに幸せ♥ふふ。こんなに吸い付いてきちゃって♥」

そんな時に視界の隅に膨らんでいるあるモノが目に入ってきた。

「うううう……あれって……」



はま

こゝろ

それを見たななかは先程の本であったブレイの「っを思い出しながらズボンのチャックをゆっくりと降ろしていった。次にパンツをずり下げると一気に窮屈さから開放された『ち○こ』が勢いよく飛び出してきた。

「わわっ……！すごく大きい!!」

本ではぼやけて見えなかったけどこんな形してるんだ……(っ)

予想以上の大きさに驚きながらもななかはしっがりともち○こを握った。

(っ)「こんな感じで擦ると気持ち良いんだよね……(っ)」



ち〇こを上下に規則正しく擦っていくななか。
見よう見まねの拙い技術だが徐々に先走り液が滲みでてきていた。
(き、気持ち良いと出るものだよな?)
寝ててもしっかり感じてくれるんだあ(♥)
自分がち〇このお世話が出来ていると調子に乗ったななかは、
更に激しくこいていった。
まどろみの中強くなる快感を前に、とうとうおじさんが目を覚ましていた。
(あっ！起きちゃった！)



口離しちゃダメッ！

目を覚ましたら知らない生徒に授乳手コキされている状況に混乱するおじさん。
慌てておっぱいから距離をとろうと頭を動かそうとすると、
見た目に似合わず強い力で逆に引き寄せられってしまった。

（精液？ってのを出すまでやらないといけないんだよね？）

あとは……。ななかもまだ止めたくないっ！

授乳手コキを続けたいとそちらにはかり意識が集中していたななか。
その胸からいつの間にか白い液体が出ていて知らず知らず
本場の『授乳手コキ』が出来ていることに気付いていなかった。



ッ!!目の前がチカチカしてきたー!!
ななかの身体どうなっちゃうてるの!!
オナニーもしたとことのないななかが絶頂についてわかるはずもなく、
今の自分の身体の変化に理解が追い付いていかなかった。
はあっーおっぱいが熱いっー熱いよおっぱいっー
み、ミルク出ちゃうっーっーっー!!
母乳が出るようになったとことん気付いていないななかがは、
絶頂に合わせて乳腺を勢いよく駆け上がってくる母乳の気配を
初乳と勘違いしながら絶頂していった。



はあ

(はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。)
す、す……かったあ♡)

ななかは短距離走の後のような疲労感に包まれてしばらく息を整えていた。

(…♡こんな幸せで気持ち良いの味わったママになりたくなくなっちゃうよお♡)

おじさんを射精まで導けたことの満足感や自前の母乳での授乳。

何よりもそれらを経験したことにより心の奥底に眠っていた特大の母性が目覚め、

ななかは考えるより先に口に出していた。

ほらおいで♡ななかが今日からあなたのママになってあげるからね♡

おじさんは脈絡もなく未だに状況が把握できていなかったが

抗うことのできないななかのバツみ力に引き寄せられるかのように

ななかの胸に飛び込んでいった。

そんな二人の姿は異常な光景だったが、当の二人はどちらも幸せそうだった。



